

——— 高校生の服装に対する態度について ———

県立会津短大 ○松浦悠紀子 奈良女大 家政 中川早苗 岐阜女大 家政  
大 喜多佐代子 文化女大 家政 万江八重子

目的 人間主役の成熟社会の中で生活に心の豊かさを求め个性的で充実した生き方を志向する人々が増えている。高校の家庭科においても「人間らしく生きる」ための生活を主体とした教育のあり方について、男女共修をふまえて教育内容の見直しが進められている。本研究では、高校生の服装に対する興味や関心、好み、考え方、被服教育への期待などについて調査を行い、高校生の服装に対する意識やこれからの被服教育のあり方について検討した。

方法 調査は青森県から長崎県までの9県にある普通科高校の1年から3年までの男子、女子に配布数450名づつを対象に1986年11月に配票留置法によるアンケート調査を実施した。回収率97%であった。調査項目は服装に対する意識に関するもの、被服教育に関するもので構成されている。本報では、その中から高校生の服装に対する態度、服装の情報源、購買態度についての項目をとりあげ、単純集計、クロス集計、因子分析を行い検討した。

結果 服装に対する態度の単純集計結果から、高校生の多くが男女共に、場所柄を考慮し皆に好感を持たれるような服装を心がける一方で、組み合わせを工夫したり自由に自分の好きな服装をしたいと思っており、女性は特に服装で体型をカバーしたり、イメージチェンジをしてみたいと思っていることが明らかになった。また服装に関する知識や情報の多くを雑誌やカタログ、店頭の商品などから得ている者が多く、購入するときには、色、柄、デザインが好きなもの、自分のイメージに合ったものを重視していることが明らかになった。服装に対する態度の構造を因子分析した結果5つの主要な因子が抽出された。